

## 野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について (3)

—広島市「鯉」と「裸のリン」の調査から—

岡本 直行<sup>1)</sup>\*

1) 新見公立短期大学幼児教育学科

(2018年11月21日受理)

鑑賞教育にふさわしい野外彫刻の在り方について具体的に考察するために、広島城中央公園・自由広場の栄久庵憲司作「鯉」と広島市西部開発地区埋立第五公園の佐藤忠良作「裸のリン」の設置方法や作品の芸術的要素、作品と環境のかかわりについて調査した。

栄久庵憲司作「鯉」は、広島が歩む姿を重ね表現した作品であり、題材や素材、構成がマッチしたモニュメントであった。しかし、作品に適した空間の広さがないこと等から、作品と空間環境の関係が全く吟味されていない彫刻空間の例であった。そこで、作品の全体像が鑑賞しやすい理想的な空間環境の広さを推測するために“作品の全体像を捉えやすく、かつ楽に鑑賞できる”視線の角度を求める実験を行った。その結果、作品の鑑賞に適した凝視角度は25度であることがわかった。その凝視角度を基に鑑賞教育に適した彫刻空間の広さや高さを求めることができると考える。

佐藤忠良作「裸のリン」は、身体全体のわずかな動きによってシンメトリーの構成を崩し、量感と動勢、内面的な感情や生命感が溢れる作品であった。その環境は、点・線・円の鑑賞法で作品を楽しむことができるが、作品の設置の高さや向き等に問題があると考えられる。前述した鑑賞に適した凝視角度25度を用いて、作品に適した台座の高さを求めるとともに、作品の構成や技法と作品の正面の在り方について考察した。

彫刻を中心とした空間環境づくりにおいて、空間の広さや設置の高さ、向き等の吟味を重ね、「作品鑑賞に適した空間づくり」を心掛けたパブリックアートは、鑑賞者に大きな感動や心地よさを与える存在となり、作品鑑賞教育のよき教材となる。

(キーワード) 鑑賞教育、美術、表現、彫刻

### 1. はじめに

都市空間には彫刻やモニュメントといったパブリックアートが多数存在し、設置された空間に新たな三次元の空間を発生させ各都市の特徴を作り上げている。街の通りに存在する彫刻は行き交う人々に語り掛け、人々の心を和ませる存在、また、美術教育において重視される鑑賞教育の教材となる可能性を秘めている。すなわち、環境に調和する彫刻や造形作品を設置することは、都市に芸術的要素のある美的空間を創造するとともに、人々に常に作品と触れあい親しみ環境を整えることになる。そのような理想の環境は人々の感性や表現を向上させる力となるであろう。

筆者は、「表現の鑑賞における立体作品のあり方(1) —パブリックアートと空間の関わりから—」において、彫刻を取り入れた都市計画、いわゆる“彫刻のある街づくり”について研究し、歴史的変遷や野外彫刻の設置状況や課題、そして、彫刻が都市空間の構成要素や鑑賞教育の教材となりうることにについて述べた。しかし、彫刻の設置環境に関

題があることやそれが放置されたままである状況についても触れ、芸術性の高い環境、また、鑑賞教育のよい教材となるには、街づくりや彫刻に関する優れた考察や環境改善が重要であることも言及した。また、「表現の鑑賞における立体作品のあり方(2) 広島市「嵐の中の母子像」の調査から—」において、作品の設置状況や作品の構築について調査し、鑑賞教育にふさわしい野外彫刻の在り方について考察した。

本研究では、鑑賞教育にふさわしい野外彫刻の在り方をより具体的に研究するために、生まれ故郷である広島市で調査した彫刻125点の中から、広島城中央公園・自由広場の栄久庵憲司作「鯉」と広島市西部開発地区埋立第五公園の佐藤忠良作「裸のリン」を取り上げ、理想的な野外彫刻の設置方法や作品に秘められた芸術的要素、作品と環境のかかわりについて考察し、鑑賞教育の教材となる彫刻のあり方を見出すことを目的とする。また、“作品の全体像を捉えやすく、かつ楽に鑑賞できる”視線の角度についての調査を行い、作品の設置に適した高さや環境の広さ等を算出

\*連絡先：岡本直行 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

し、理想的な彫刻空間（空間環境）について考える。

## II. 栄久庵憲司作「鯉」の概型

栄久庵憲司は、ステンレスのパイプを連結させ構成したモニュメントを多く制作している彫刻家である。広島県立図書館の正面入り口前には、パイプを人々の心に見立て心と心のつながりを表現した抽象作品を鑑賞することができる。また、広島城の中央公園・自由広場には、翼を持つ魚を表現した「鯉」が設置されている。中央公園には他にも数多くの彫刻が存在し、様々な個性ある空間が構成され、訪れた人の目を楽しませている。

作品が設置されたのは1989年の「海と島の博覧会」の時であり、「広島がいま現状の状況よりもさらなる飛躍を遂げ、まだ見ぬ21世紀に向かってはばたいていく<sup>1)</sup>」という意味を含んでいる。この作品の基となった主題は中国の古物書によるものであり、魚であった鯉が鳥となったという逸話に由来している<sup>2)</sup>。広島城が鯉城と呼ばれることから、この彫刻の魚の姿はこれまでの広島を象徴したものであり、鳥の姿は作品の設置当時（1989年）、また、その後、広島が歩む姿を表現しているものと考えられる。広島への誓いであり、作品の題材は広島にふさわしいといえる。

ステンレスパイプの連結で構成された作品は、現代的な建築を思わせる素材の使用によって、広島への復興と近現代的な街づくりを連想させる。また、素材とジャングルジムのような構成がマッチし、翼をはり大きく羽ばたく、広島への力強さを表現している。パイプで構成される空間からは空を垣間見ることができ、実量の大きい金属で構成された作品に軽快感を与え、鳥が羽ばたき広大な空に飛び立つという、ユーモラスなモニュメントとなっている。

## III. 鯉の設置状況に関する考察

では、作品の設置状況について考えてみたい。このモニュメントは雑木林の中に設置されており、多くの樹木に取り囲まれている（図1、図2）。作品の中心から最も近い木の幹は8.05mの位置に存在し、最も遠い木は16.05mしか離れていない（図3）。木の枝や葉の存在を考えると、樹木が占める環境はさらに設置場所に入り込んでくるため、彫刻の中心から半径6mの範囲外が作品に影響を与える場所となる。モニュメントの寸法は、頭部から尾までが15m、広げられた翼は18.5mにも及ぶ（図4）。周囲の木は作品よりも背丈の高いものが多く、半径6mの環境の外側からは作品の鑑賞が不可能である。この設置空間の西側には小高い土手が存在するが、そこからでも十分に作品を鑑賞することができない。また、翼の一部は樹木に隠れるほどであり、鯉の空間環境は、巨大な作品を設置するに適していない。作品が持つ題材の宇宙観・未来感の広がりには欠ける空

間環境といえる。

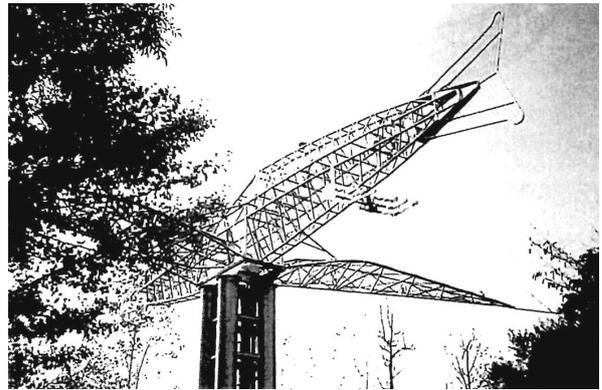


図1 鯉の設置空間 1

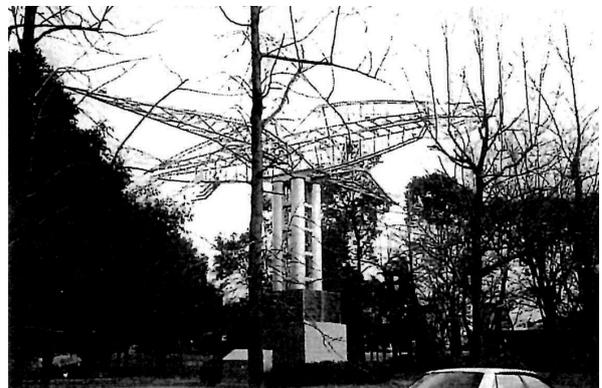


図2 鯉の設置空間 2

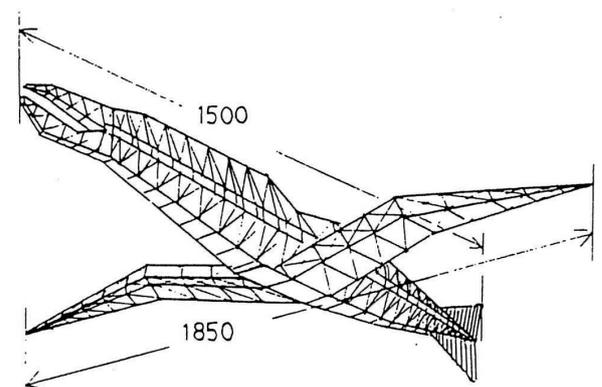


図3 鯉の全長（単位はcm）  
※これは筆者が測定したものである

作品の設置の高さは、土台や植込み、ステンレスの柱等を含めると5.9mである（図5）そのため、半径6mの空間で彫刻を鑑賞する人は、かなり高い位置にある作品を見上げなくてはならない。作品を低い位置に設置し直し、鑑賞しやすくすることも可能だが、作品の大きさや空にはばたくという意図を考慮すると、高さを変更することは、決して

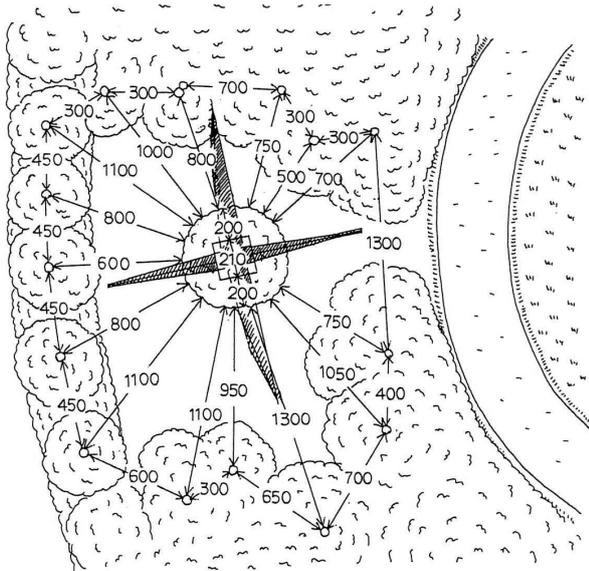


図4 鯉の設置空間見取図(単位はcm)  
※これは筆者が測定したものである

よい効果を生むとはいえない。作品の主題を適切に理解でき、十分に鑑賞できる環境空間を作るには、現在の高さを維持しながら、作品の全体像をとらえることの可能な広さが必要となる。この作品が広島を象徴しているだけに、現在の設置状況が放置されることは望ましいことではないだろう。

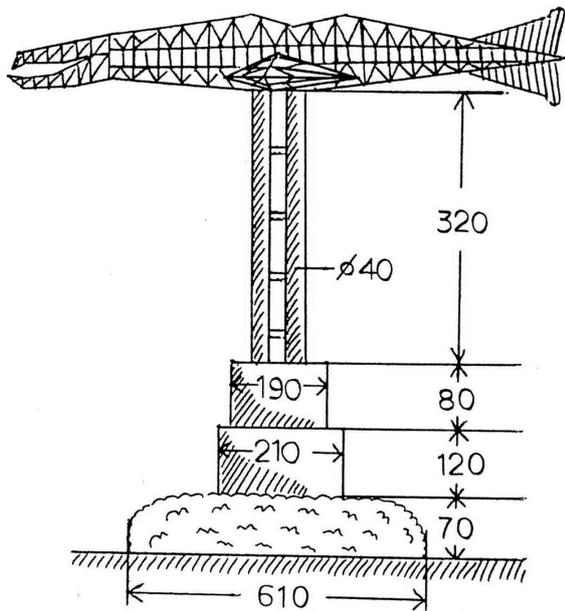


図5 鯉の設置状況(単位はcm)  
※これは筆者が測定したものである

彫刻の鑑賞教育に適した空間の広さを求めるために、実験を行った。それは、鑑賞者の視線の適当な角度を求め、そ

の角度を基に空間の広さを推測しようとするものである。H市S高等学校の高校生100人を被験者として、“作品の全体像を捉えやすく、かつ楽に鑑賞できる”視線の角度についての調査を行った。

調査対象者は、H件H市高等学校に通う高校生100名である。選定方法は、1年生、2年生、3年生の中からランダムに選定した。調査期間は、2018年6月11日(2時間)、6月12日(2時間)、6月18日(2時間)、6月19日(2時間)、6月25日(2時間)、6月26日(2時間)、合計10時間である。倫理的配慮として、被験者に研究の目的や方法、内容について説明し、同意を得た。

実験の方法は、①椅子に座った被験者の視線の角度(凝視角度)が水平になる位置を0度とし、椅子から2mの距離、凝視角度0度の位置にピンポン玉をつるす、②凝視角度が10度ずつ増加するように、0度、10度、20度、30度、40度、50度とピンポン玉の位置を移動させ、被験者にピンポン玉を見つめてもらう、③鑑賞のしやすさを角度ごとに申告してもらう、というものである。調査の結果は以下の通りである。

凝視角度	A 鑑賞しやすい	B 鑑賞しづらい	Aの割合
0度	100人	0人	100%
10度	100人	0人	100%
20度	99人	1人	99%
30度	42人	58人	42%
40度	17人	83人	17%
50度	4人	96人	4%

表1 鑑賞のしやすさの実結果(凝視角度0度~50度)

上記の結果から、ピンポン玉を楽に見ることのできる者の割合は、凝視角度20度と30度の間で大きな差を生じることが確認できる。すなわち、作品鑑賞における視線の角度は20度から30度が適しているということになる。しかし、20度と30度の角度差は大きいため、より詳細な凝視角度を求めることが必要となる。そこで、前述した実験に協力者である高校生100人を被験者とし、同様の方法で20度から30度まで、1度ずつ凝視角度が上がるように設定した実験を行うことにした。結果は表2の通りである。

この結果から、鑑賞しやすいと答えた被験者の割合の格差が大きかったのは、25度と26度の間であり、作品の鑑賞に適した凝視角度は25度であることが分かった。この凝視角度を基に、5.9mの高さに設置された鯉に適した空間の距離を三平方の定理から求めると、12.7mであった。以上から、この彫刻を設置する空間の広さは、半径12m以上が必要といえる。

この作品の設置状況を作品鑑賞の観点から考えると、作品を非常に狭い空間に無理やり押し込めていること、鑑賞者の視線がかなり見上げる角度となること、魚や鳥をモチ

凝視角度	A 鑑賞しやすい	B 鑑賞しづらい	A の割合
20 度	100 人	0 人	100%
21 度	100 人	0 人	100%
22 度	99 人	1 人	99%
23 度	99 人	1 人	99%
24 度	97 人	3 人	97%
25 度	86 人	14 人	86%
26 度	59 人	41 人	59%
27 度	48 人	52 人	48%
28 度	46 人	54 人	46%
29 度	43 人	57 人	43%
30 度	41 人	59 人	41%

表 2 鑑賞のしやすさの実験結果（凝視角度20度～30度）

ーフとした作品の動勢が遮られること、周囲を取り囲む樹木が広がりのない閉塞的な空間を生み出していること等から、作品と空間環境の関係が全く吟味されていない彫刻空間の例といえる。

#### IV. 佐藤忠良作「裸のリン」の概観

佐藤忠良は、現代日本の具象彫刻を代表する作家の一人である。ロダン、ブールデルといったフランス近代彫刻の巨匠の作品との出会いから、半世紀にわたって彫刻制作の道を歩んだ。佐藤忠良の作品は、1981年パリのロダン美術館において日本人最初の個展として展示され、世界の人々の理解と称賛を得た。広島市内には、広島現代美術館の“彫刻の小道”に設置された「ポケット（1984年作）」等が有名である。本章で取り上げる「裸のリン」は広島市西部開発地区の埋立第五公園内に設置されている（図6）。その他、埼玉県川口市、青森県青森市、東京都府中市でも鑑賞することができる。

埋立第五公園は、企業施設や展示施設、各社企業の本社等が隣接する広島市西区商工センターで生活する人々の憩いの場として開設され、芝生広場やテニスコート、運

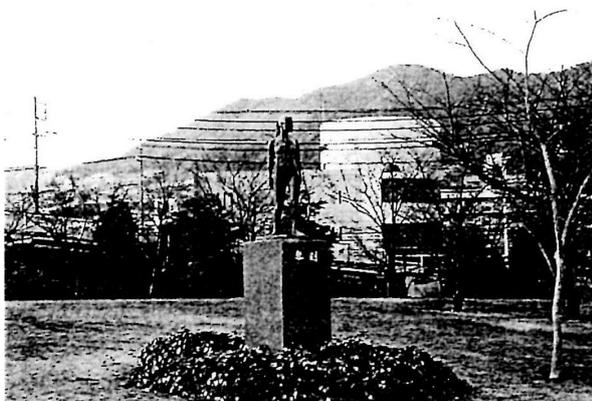


図 6 裸のリンの設置空間

動場には、桜・紅葉等四季折々の美しい風景が溢れる。その公園には裸のリンの他に、石の彫刻家として知られている空充秋氏の「西部の門」等の彫刻が設置されており、自然と作品の調和が見られる空間環境である。公園の正面入り口右手側に設置された裸のリンの台座には、明け方や夜明けを意味する「黎明」と刻まれており、輝かしい次の時代への始まりの意が込められていると推測できる。公園の開設や彫刻の設置は西部開発に関係する街づくりや憩いの場づくりの一環と考えられる。

「野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（1）」において、山口県宇部市の“彫刻ビエンナーレ”や宮城県仙台市の“杜と彫刻”計画等のように、作品が設置される環境に合わせて作家が作品の構想を重ね制作することが理想的な彫刻の設置方法<sup>3)</sup>であるが、この空間環境は地域や風土を意識して制作されたものではない。裸のリンは、1977年に開催された「第41回新制作展」に出品された彫刻である。市民の憩いの場づくりのために彫刻が設置され、“彫刻による街づくり”がブームとなった1980年代前半の文化的環境の構築計画に欠かすことのできなかった方法<sup>4)</sup>がとられたものと考えられる。

裸のリンの様相はシンメトリーを基本としたポーズで非常に動きの静かなものであり、周囲の空間を静穏な雰囲気にとめる役割を担っている。右足をそっと後方に引き、くびを大きく右にひねることによって、シンメトリーの構成を崩し、静かなポーズの中にも動勢が感じられるように工夫された作品である。しなやかな細身の身体の中に、表現できるだけの量感を持たせ、充実した生命さえ感じさせる。外形的な誇張に捕らわれることなく、内面的な感情や生命感を三次元の構築に持ち込んだ表現といえよう。幼さの残る人体の描写や仕草によって、大人になる少女の期待や不安等を見事に表している。

佐藤忠良著『彫刻をつくる』には、「彫刻は絵画や映画のように幅広いモチーフを扱うにはあまりにも不便な芸術です。限定の世界では、多くを語るといっても深く語らなければなりません<sup>5)</sup>。」という言葉や、また、『少年の美術』には、「写実は単なる自然描写ではありません。作者が対象に対して抱いた共感、つまり対象から受ける衝動が大切なのです。<sup>6)</sup>」という言葉を残している。この点から、彫刻制作では人体の姿かたちを上手く写すことが目的でなく、人体のかたちを通して対象にひかれる作者の心象を表現することに重点が置かれていることが分かる。

#### V. 裸のリンの設置状況に関する考察

裸のリンが設置された広場は、後方に空間が広がっている。公園の外の建築物や遠くにそびえる山が背景となり、

作品の持ち味と調和した景観となっている。作品の空間環境には、右側面に雑木林が存在しているが、それ以外で作品に影響を与えるものは存在していないといってよい。作品の中心から3.98mの場所に最も近い気が立っているが、それ以外の樹木は、半径9.68mの円形の空間よりも外に存在しているからである(図7)。また、360度のどの位置からも作品の鑑賞が可能な環境でもあり、「野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について(2)」で述べた、「点の視線による鑑賞法、線の視線による鑑賞法、円の視線による鑑賞法<sup>7)</sup>」を用いた作品を楽しむことができる。自然を背景に、また、周囲の環境の広さを充分に持った彫刻は、季節や天候の移り変わりにも見事に調和し、変化に富む姿を見せるだろう。

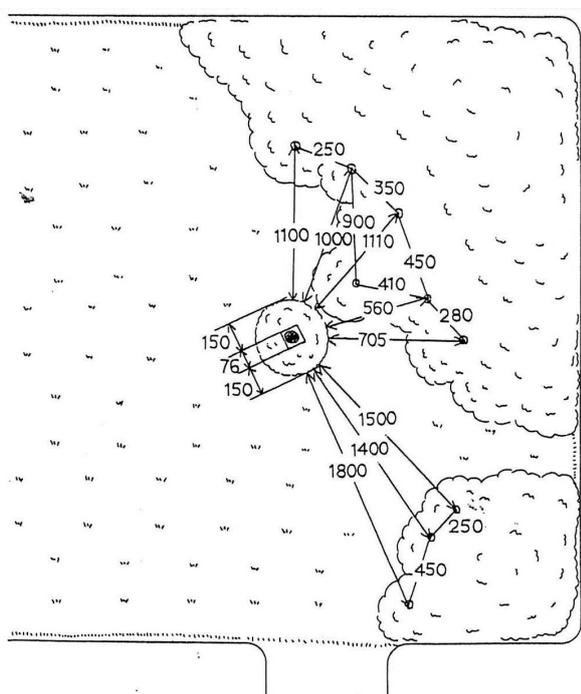


図7 裸のリンの設置空間見取図(単位はcm)  
※これは筆者が測定したものである

しかし、この空間環境には何点かの問題があると考えられる。1点目は設置の高さである。作品の台座は160cmの高さがあるが、台座が置かれた地面は後方から前方に向けて12度の下り傾斜がある(図8)。植込みの手前に立ち鑑賞する場合、鑑賞者が立つ位置は台座の置かれた場所よりもさらに約40cm低い位置となる。その位置よりも後方にはなれるとさらに作品との高低差は大きくなり、目線の凝視角度も大きくなる。これでは遠近感による比率の歪みが大きくなるといえる。

さらに、この作品は前述したように新制作展に出品されたものであるため、160cmの台座に置かれることを想定して制作されたものではない。彫刻制作でよく使用される

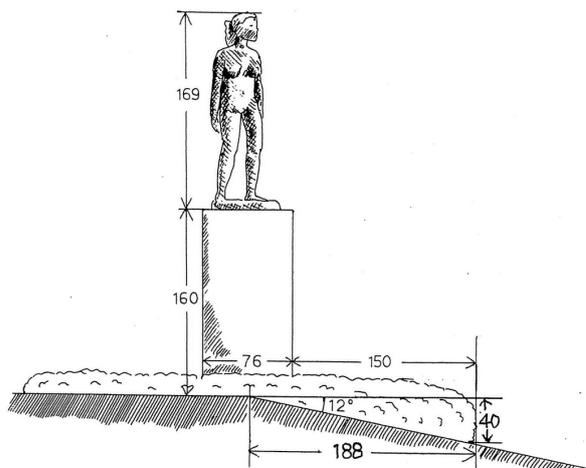


図8 裸のリンの設置状況(単位はcm)  
※これは筆者が測定したものである

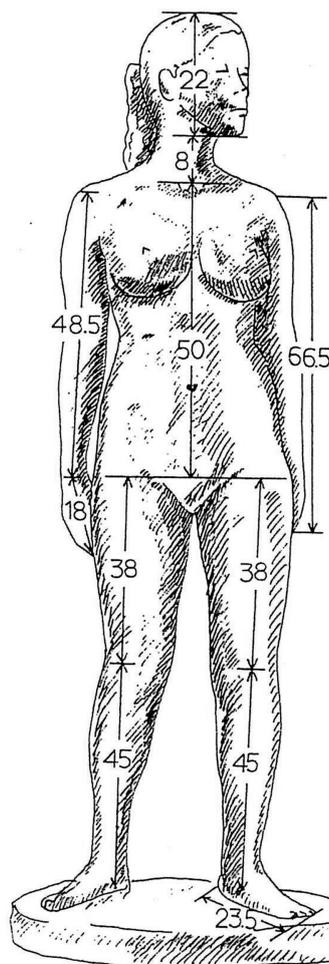


図9 裸のリンの各部の長さ(単位はcm)  
※これは筆者が測定したものである

「カノン<sup>8)</sup>」と比較するため、作品の各部の長さを計測した。計測の結果、頭部の長さは22cm、頸が8cm、鎖骨から恥骨までが50cm、脚が81.6cm、腰から膝までが38cm、膝から踵までが45cm、腕が66.5cm、手が18cm、足が23.3cmであることが分かった（図9）。

カノンから割り出した各部の理想の長さを実寸の各部の長さを比較したところ、頭部が少々大きく作られているが、その他の部分はほとんど差がないことが分かった。つまり、裸のリンは、ほぼカノンの寸法に基づいて制作されたことが推測できる。カノンの比例を用いて各部分の長さを決め、制作を進めていく時の目線は、水平視線が臍の周囲になる高さに設定するのが一般的である。それは、全体を眺めながら制作していく上で、最もバランスよく各部を見渡すことが可能だからである。以上の観点から考察すると、160cmの台座は高すぎると考えられる。また、台座の周囲背景188cmの円形内には植込みがあり、植込みのすぐそばに立って観賞した場合、前述した12度の土地の傾斜による高低差約40cmが発生し、鑑賞者にとっての台座の高さは約200cmになってしまう（図8）。目線を水平にして鑑賞した場合、かなりの鑑賞者の目の前には台座が存在することになり、作品は下から見上げられることになる（図10）。この点から、台座はより低いほうが望ましいことが分かる。

前述した鑑賞に最も適した凝視角度25度を用いて、作品

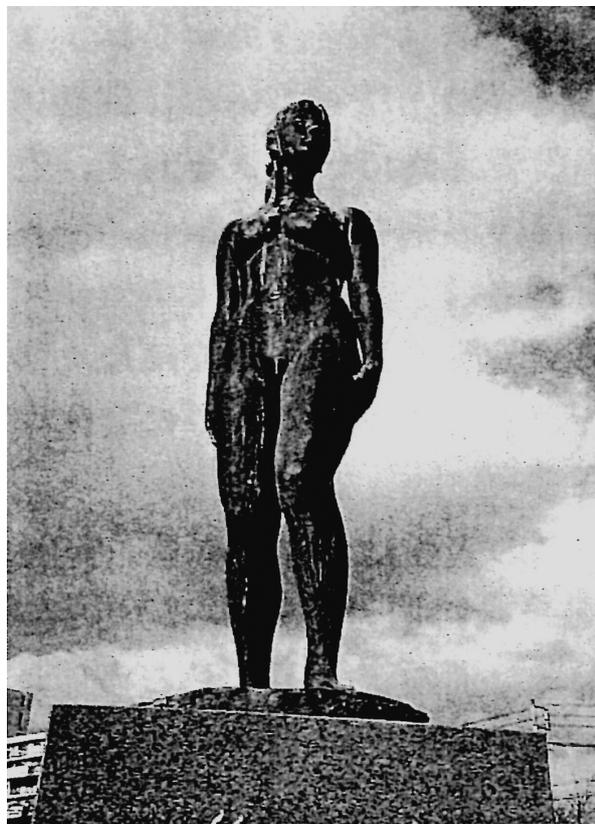


図10 至近距離から鑑賞した裸のリン

に適した台座の高さを求めてみた。2017年4月1日にNHK「おはよう日本」で特集された「成長が止まった!?日本人の身長」では、日本人男性の平均身長は170.7cm、日本人女性の平均身長は157.8cmであった。男女の平均身長は164.25cmであり、その平均身長の人が作品の周囲にある植込みの前に立ち作品を観賞することを想定すると、全体をバランスよく見渡すことのできる適切な高さ（土地の高低差約40cm+台座の高さX+作品の高さ169cm）は約247cmとなる。その高さから作品の高さ169cmと土地の高低差40cmを引くと約38cmとなる。すなわち、裸のリンを観賞する際に適した台座の高さは約78cmであり、この土地に設置する施工上の台座の高さは38cmと判断できることになる。

この作品は、私たちの身近に存在するアートを位置情報とともに紹介し、アートを気軽に感じることを目的に、平井健一郎氏、平田健志氏、中村雄太氏、石塚裕子氏、大國谷文秀氏らによって開設されているパブリックアートのポータルサイト「@ART<sup>9)</sup>（アットアート）」でも取り上げられている。そのサイトに掲載されているのは、埼玉県川口市の川口西公園のものであるが、台座の高さは作品の高さの約半分である。この点からも、埋立第五公園の設置の高さが高すぎることが分かるであろう。

2点目は、作品の正面を体のどの部位ととらえるかということである。現状では、台座の正面と顔の正面を合わせるように設置されており、設置者は、顔が正面となる向きを作品の正面と判断したことになる。この向きに正面を持つてくることによって、作品は頭部から身体の胴部を左側面にひねる形態をとる。そうすると、右脚と左脚が重なり合ってしまうため、両脚で構成される三角形の空間の存在が見えにくくなる。同様の現象が腕にも見られ、この作品は「つまって」見え、構成の面白さや確かな量感を感じさせることがない。それによって、彫刻の持つ柔らかさや量感、動勢、空間までが失われて見えてしまう。

この点を解消するためには、胴部の正面を作品の正面ととらえて設置するのが望ましいと考える。胴部が正面となることによって、足を前後にずらし、頭を右にひねる形態の動きが一望でき、作品の動勢を感じる事が可能となるからである。さらに、この彫刻は酸性雨によるブロンズの腐食が激しい。雨の流れた痕跡が複数の線となって表れており、鑑賞の際に量感やリズム等作品のよさが見えにくくなっている。鳥の糞等の汚れも付着したままであり、設置後の管理体制に配慮が見られない例といえる。

## VI. まとめ

鑑賞教育にふさわしい野外彫刻の在り方について考察するために、広島城中央公園・自由広場に設置された、栄久庵憲司作「鯉」と広島市西部開発地区埋立第五公園に設置された、佐藤忠良作「裸のリン」を取り上げ、その設置

状況を調査した。

栄久庵憲司作「鯤」は、翼を備えた魚の姿に広島が歩む姿を重ね表現した作品と考えられることから、題材は広島にふさわしいものであった。また、作品はステンレス素材と構成がマッチし、翼をはり羽ばたく広島力強さが表現され、パイプで構成される空間が軽快感を与えるユーモラスなモニュメントであった。しかし、設置の状態は悪く、作品の一部が樹木に隠れ、鑑賞者がかなりの角度で作品を見上げる必要があった。鯤の空間環境は、巨大な作品を設置する環境とはいえず、作品の題材や宇宙観・未来感の広がり欠ける空間環境と考えられる。鯤の鑑賞に適した環境空間を作るには、現在の高さを維持しながら、作品の全体像をとらえることのできる広さが必要となる。

そこで、作品に適した空間の広さを導き出し、理想的な空間環境の広さを推測するために“作品の全体像を捉えやすく、かつ楽に鑑賞できる”視線の角度を求める実験を行った。その結果、作品の鑑賞に適した凝視角度は25度であり、この凝視角度を基にこの彫刻を設置する空間の広さは、半径12m以上が必要と考えられた。

作品観賞の観点から鯤の空間環境について考えると、作品に適した空間の広さがなく、鑑賞者の視線が大きな角度であること、作品の動勢が遮られること、閉塞的な空間を生み出していること等から、作品と空間環境の関係が全く吟味されていない彫刻空間の例といえる。

佐藤忠良作「裸のリン」が設置された空間は、桜・紅葉等四季折々の美しい風景が溢れ、自然と作品の調和が見られる空間環境であった。台座に刻まれた「黎明」の文字から、輝かしい次の時代への始まりの意が込められていると推測できる。作品の様相は動きの静かなものであり、周囲の空間を静穏な雰囲気にとめる役割を担っている。身体全体のわずかな動きによってシンメトリーの構成を崩し、細身の作品の中に最大限の量感と動勢を持たせ、内面的な感情や生命感を三次元の構築で表現した、充実感溢れる作品として完成していた。

設置された広場の空間環境は、360度のどの位置からも作品の鑑賞が可能な環境であり、点の視線による鑑賞法、線の視線による鑑賞法、円の視線による鑑賞法で作品を楽しむことができた。季節や天候の移り変わりにも調和し、変化に富む姿を見せるであろう。しかし、この空間環境には作品の設置の高さや作品の向き等に問題があると考えられる。

作品の台座は160cmの高さであったが、台座が置かれた地面は前方に向けて12度の下り傾斜があるため、鑑賞者が全体を見渡そうと後方に下がるほど作品との高低差が生じ、遠近感による比率の歪みが大きくなる。前述した鑑賞に最も適した凝視角度25度を用いて、作品に適した台座の高さを求めると、裸のリンを観賞する際に適した台座の高さは約78cmであり、施工上の台座の高さは38cmと判断でき

た。

作品の正面は台座の正面と顔の正面を合わせて設置されていた。しかし、右脚と左脚が重なって見えるため、両脚で構成される三角形の空間の存在が消え、構成の面白さや的確な量感を感じさせることがなくなっていた。この点を解消するためには、胴部の正面を作品の正面ととらえるのが望ましい。そうすると、足を前後にずらし、頭を右にひねる形態の動きが一望でき、作品の動勢を感じることができると考えられる。

さらに、この彫刻は酸性雨によるブロンズの腐食が激しい。雨の流れた痕跡が複数の線となって表れており、鑑賞の際に量感やリズム等作品のよさが見えにくくなっている。鳥の糞等の汚れも付着したままであり、設置後の管理体制に配慮が見られない例といえる。

本研究で調査した2点の彫刻空間は、作品の題材や構成、心象等のよさや面白さが、不適切な作品の設置方法によって失われた例と考える。彫刻を中心とした空間環境づくりにおいて、その持ち味を充分に考慮しながら、空間の広さや設置の高さ、向き、維持管理状況等の吟味を重ね、末永く人々を楽しませる「作品鑑賞に適した空間づくり」を心掛ける必要があるだろう。そのようにして、作り上げられたパブリックアートは、鑑賞者に大きな感動や心地よさを与える存在となり、作品鑑賞教育の良き教材となると考える。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、貴重なお時間を割いて調査に協力して下さったH県S高等学校の生徒の皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。謝辞にかえさせていただきます。

## 注

注1) 広島城中央公園・自由広場 栄久庵憲司作「鯤」のキャプションより

注2) 広島城中央公園・自由広場 栄久庵憲司作「鯤」のキャプションより

注3) 岡本直行；野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（1）—パブリックアートと空間のかかわりから—，新見公立大学紀要第38巻第1号，2018，pp91-92

注4) 岡本直行；野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（1）—パブリックアートと空間のかかわりから—，新見公立大学紀要第38巻第1号，2018，pp90

注5) 建畠覚造 尾川宏 舟越保武 佐藤忠良 植木茂 井上武吉；彫刻を作る，美術出版社，1965，pp49

注6) 佐藤忠良；少年の美術，現代美術社，1980

注7) 岡本直行；野外彫刻を対象とした表現における鑑賞

について(2)一広島市「嵐の中の母子像」の調査から  
一、新見公立大学研究紀要第38巻第2号, 2018, pp96  
注8) C・H・Strats: 女体の美, 刀江書院, 1970, pp70  
注9) @ART PORTAL SITE OF PUBLIC ART, 佐藤  
忠良 / 裸のリン紹介ページ  
<http://at-art.jp/japan/saitama-japan/kawaguchi/%E4%BD%90%E8%97%A4%E5%BF%A0%E8%89%AF-%E8%A3%B8%E3%81%AE%E3%83%AA%E3%83%B3/>

## ㊦ 献

- 1) 岡本直行: 野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について(1)一パブリックアートと空間のかかわりから一, 新見公立大学紀要第38巻第1号, 2018
- 2) 岡本直行: 野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について(1)一パブリックアートと空間のかかわりから一, 新見公立大学紀要第38巻第1号, 2018
- 3) C・H・Strats: 女体の美, 刀江書院, 1970
- 4) 現代彫刻懇談会: 世界の広場と彫刻, 中央公論社, 1983
- 5) 藤田親龍: 彫刻のある風景, 新日本出版社, 1983
- 6) 田村明: 都市と彫刻, 世界の広場と彫刻, 中央公論社 1993
- 7) 本間正義: 日本におけるパブリックスペースの彫刻, 世界の広場と彫刻, 1983
- 8) 別冊太陽: パブリックアートの世界, 平凡社, 1995
- 9) 今井祝雄: アーバンアート, 学芸出版社, 1994
- 10) 佐藤忠良: 佐藤忠良 彫刻七〇年の仕事, 講談社, 2008